



いづみ

No.91

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 61



《ハルノウタ》

櫻井 純

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 61

作者の言葉

たくさんの偶然と多くの出会いから、テラコッタでの制作が私の表現となりました。土のもつ温かさや素朴な質感に繊細さを表現するだけではなく、仏像のような凛とした佇まいの中にある力強さを表現できればと思いながら、日々制作に励んでいます。

とはいえ、素材に頼りすぎているのは重々自覚しているので、今後は、テラコッタの可能性を更に追求し、自分の表現を模索していきたいと考えています。

(函館市在住 赤光社会員、全道展会員)

タイトル : ハルノウタ
制作年 : 2024 年
素 材 : テラコッタ
サ イ ズ : H70×W40×D25 cm
作者蔵

連載

宮の森の四季 61

本郷新記念札幌彫刻美術館

「冬も賑やか」

館長 吉崎 元章

近年の本郷新記念札幌彫刻美術館は、冬の方が賑やかかもしれません。

今年1月24日から26日にかけて開催した「さっぽろ雪像彫刻展」には、3日間で1,000人を超える来場者がありました。前庭にはこれまで16回のうちで最も多い13基の作品が並び、これに先立つ雪積みや制作の一週間も、連日多くの作家や学生たちが出入りして、活気に満ちていました。今年は雪が少なく大変でしたが、近くの空き地から許可を得て雪をもらい、プラスチックのソリを改造して学生たちが何往復もして運ぶなど、工夫と労力で乗り切りました。

また、さっぽろ雪まつりの大通会場6丁目には、今年も雪像彫刻5基を出張制作。他の雪像とは明らかに異なる、雪を素材とした抽象的な立体造形作品が注目を集めるとともに、当館の名を大通会場を訪れた177万人もの方々に知ってもらうのに一役買ったことでしょう。

2月には、貸館で「北の美大展（仮）」という美術を学ぶ大学生たちによる展覧会を開催。市内で卒業制作展が盛んに行われている時期に、大学を横断して集まった現代的志向の強い有志15人が、北海道の美術教育環境や新人発掘の場への問いをベースに、新鮮な感性の作品を展示しました。2週間の会期中は、これまでなかったぐらいに若い層を中心とした熱気に溢れ、我々も何か元気をもらった感じです。

これからも、寒さと雪で籠りがちな季節だからこそ、逆にそれらを大いに楽しみながら活発に活動していきたいと思っています。



ワインの釉薬～イタリアでの成果について

彫刻家・古典彫刻技法研究家・沖縄県立芸術大学教授 松本 隆

2024年10月26日、イタリア中部マルケ州の都市ウルバーニアにあるドゥカーレ宮殿・ヴォルポーニ・ホールにて、ピッコルパツソ生誕500年記念国際会議「チプリアーノ・ピッコルパツソ『陶芸三書』—過去と現在の陶芸技術について」が開催されました。私たちの研究チームも、この会議で3つの発表を行いました。

ウルバーニアは、ルネサンス期にイタリアを代表する陶器マヨリカ焼の一大産地として繁栄しました。「マヨリカ(マジョリカ)」という名称は、当時ヨーロッパに影響を与えたスペイン陶器が、マヨルカ島を経由して輸入されたことに由来し、やがてこの時代のイタリア陶器そのものを指すようになりました。マヨリカ焼は低温錫釉陶器の一種で、赤茶色のテラコッタ素地に白い釉薬を施し、カラフルな顔料で絵付けをした後、約900度で焼成します。歴史画装飾陶器「イストリアート」や、華麗なグロテスク模様を特徴とする作品など、さまざまなジャンルがあり、どれもルネサンスの精神を反映した美しさを誇ります。この地が「カステル・ドゥランテ」と呼ばれていた16世紀半ば、世界で初めて詳細な陶芸技法書が著されました。それがチプリアーノ・ピッコルパツソ(1524-1579年)による『陶芸三書』です。

私は数年前、マヨリカ技法を用いた彫刻家デッラ・ロッビアの研究のため、この書物に記された釉薬の原材料「ワインの澱」を探し求めました。紆余曲折の末、札幌彫刻美



術館友の会の皆様のご協力を得て、実験に必要な材料を奇跡的に入手することができました。それから7年にわたり地道な研究を続け、ようやくロッビアやマヨリカ焼を扱う、バルジェッロ国立美術館などの主要美術館での本格的な調査を実施することとなりました。今回の発表も、この調査に合わせて企画されたものです。私は「実験考古学的アプローチを通じた『陶芸三書』の技法研究」と題し、ワイン澱の採取、そこから生まれる「マルツアコット」というガラスの作成、そして施釉実験を中心に発表を行いました。北海道産ワインがイタリアの人々にどのように映ったのか、興味深い点です。研究チームは化学分析や美術史の専門家と連携し、領域横断的な研究体制を構築しています。今後もさらなる課題に向け、研究を継続していきたいと考えています。あらためまして、この研究の成功のきっかけをいただいた札幌彫刻美術館友の会の皆様に、心より感謝申し上げます。

抜海への旅

梁井朗(友の会会員)

「^{ばっかい}抜海」といえば、札幌彫刻美術館友の会の皆さんには説明不要でしょう。本郷新の釣り人としての号です。稚内市郊外にある漁村からつけたと思われます。

文人や書家が号を持つのはよくありますが、釣り人の号などというものは寡聞にして聞いたことがありません。本郷新はよほど魚釣りが好きだったのでしょう。



その抜海の名を有する鉄道駅が今年3月15日に行われるJR北海道のダイヤ改正とともに廃止されると聞き、1月下旬に行ってきました。

自家用車を利用するという選択肢はありません。鉄道ではなく車で駅を訪れるのはどうかと思うし、それにもまして、真冬の日本海側を運転するのは時として非常に危険だからです。地吹雪になれば数メートル先が見えなくなってしまうのです。

2003年10月発行の「いずみ」第5号に、仲野三郎会員が「抜海は本郷新の釣り人の号です」という題の文章を寄せ、次のように書いています。

本郷新は「彫刻と釣りの世界」と題する竹田厳道との対談の中で次の様に言っている。

竹田：先生に釣りの号がありましたね。

本郷：ええ、抜海です。稚内の近くにこうした地名があります。アブラコの見事な大物を釣り上げた時、海から抜きあげるようにしたのでそれで抜海ですわ。その時の獲物は60 cmくらいあったかな。

もちろん地名の抜海の語源はアイヌ語でしょう。

なお、竹田厳道は、今はなき北海タイムス社長を経て独立し、絵画の月賦販売や雑誌発行を手がける「一枚の繪」（繪は絵の旧字体）を創業した人物です。

抜海駅は勇知駅と南稚内駅の間にあり、特急の止まらない無人駅です。止まる列車は1日に下り3本、上り4本です。

乗り降りする人が少ないから廃止されるのですが、こんな本数では利用したくてもなかなか利用できません。抜海駅は稚内市街から10キロ以上離れていて、附近にはバス路線もないのです。

時刻表とにらめっこして旅程をあれこれ考えても、稚内などに前泊しないと抜海には到達できないことが分かりました。1日目は旭川で途中下車して美術館に寄った後、特急サロベツ1号に乗って、終着の稚内駅に近いホテルに泊まりました。ちなみにサロベツ1号は、抜海駅周辺で野生のシカと衝突したことなどから、到着が30分遅れました。

2 日目。前夜の雪もはれて、穏やかな天気です。

南稚内駅まで市内路線バスで行き、そこからタクシーに乗りました。

釣り人をしのぶ旅で駅だけを訪れても仕方ないので、本郷が釣り糸を垂れたであろう抜海漁港から抜海駅までおよそ 2.3 キロの道を歩くことにしたのです。

抜海は小さな集落で、商店などはなく、目についた公共の建物は郵便局ぐらいでした。北のはずれに、20 年近く前に廃校になった小中学校の校舎がありました。



それを過ぎるとあとはひたすら平坦な直線道路を北上します。左は防雪柵が続き、日本海は見えません。右はどこまで行っても丘陵と疎林です。人家は全くありません。時おり自動車が通り過ぎます。仲野三郎さんの文章によると、本郷新が抜海を訪れたのは昭和 30 年前後。自家用車が一般に普及する前です。彼もこの長い道を歩いたのでしょうか。昔の人の健脚さには感心します。しかし、疲れるよりも前に、あまりの単調さに飽きてきました。ようやくはるか遠くに、Y 字路の存在を示す青い看板が見えてきました。

そこから右に道道 510 号抜海兜沼停車場線が分岐します。この道に入り 10 分ほど歩くと、抜海駅がありました。駅の周辺には人家が 1 軒あるだけで、あとは林や雪原でした。おそらく夏場は風力発電や利尻富士などが望めるのでしょう。冬は寂しい限りです。



木造駅舎は 1924 年(大正 13 年)開業当時のものです。中の壁にはポスターや写真などさまざまなものが貼られていましたが、残念ながら本郷新に関するものは見当たりませんでした。

午前 11 時 48 分。稚内行き普通列車に乗り込みました。1 輦のディーゼルカーです。

すっかり冷えた体を車内で暖めながら、抜海への冬の旅もあっさりと終わってしまったなあと感じました。窓の外にはモノクロームの冬景色がどこまでも続いていました。

2025 年彫刻美術館友の会新年会



2月15日 ネストホテル札幌駅前

札幌彫刻美術館友の会の2025年新年会が2月15日、「ネストホテル札幌駅前」（中央区北2西2）で開かれ、講演、オカリナとフルート演奏、オークションなど多彩なプログラムでにぎわい、一年の活動を誓い合った。

新年会には来賓、会員など約40人が参加。高橋大作会長が新年会のオークションに出品されるフクロウの置物になぞらえ、「フクロウはローマ神話では知恵の神とされており、今年一年、知恵を出し合いながら活動したい」とあいさつした。

梁井朗さんが新年講演会 「いつまでもあると思うな野外彫刻」

次いで新年会恒例の講演会ではブログで「北海道美術ネット」を主宰する梁井朗さん（会員）が「いつまでもあると思うな野外彫刻」のユニークな演題で講演した。

梁井さんは友の会が運営している「北海道デジタル彫刻美術館」に掲載されている彫刻が実際に現地に行くとすでになくなって台座だけが残っていた例や設置場所が施設の移転でほかの場所に移っていた例。また、いったん廃棄された彫刻群が作者の厚意で再びよみがえった例などを紹介して野外彫刻作品の不断のチェックの大切さを強調した。



フルートとオカリナ演奏で魅了



長年の会員である金井重博さんの乾杯の音頭で宴会に入り、テーブルごとににぎやかな談笑が広がる中、会員の櫻田信明さんのフルートと谷口理恵さんのオカリナ演奏が会場を盛り上げた。

宮城道雄の「春の海」で新春の気分を演出。さらに、オカリナと櫻田さんの犬の鳴き声で「口笛吹きと犬」を演奏して笑いを誘い、「津軽海峡冬景色」で締めくくった。

にぎやかにオークション 山内壮夫のレリーフも落札

引き続き、昨年好評だったオークションが行われ、木彫や陶器などのフクロウの置物のほか小品ながらブロンズの彫刻など20点が競りにかけられた。細川房子さんが競り人となって競り落とされると威勢よく木槌をたたいて雰囲気を盛り上げた。

この日の目玉である彫刻家・山内壮夫の遺族から託された石膏レリーフ「少女横顔」も落札されて新年会の幕を閉じた。



岩見沢市はぎぞの緑地

<愛の母子像><牧歌>修復へ

彫刻点検の官民連携期待

岩見沢市民から修復の方法などで要望を受けていた同市まなみーる敷地内にある彫刻<愛の母子像>(山脇正邦)について友の会が現地調査を行い、岩見沢市に修復の要望書を提出した。実現すれば市と住民による官民連携の彫刻保全システムとして期待される。

きっかけは一昨年、同市のロータリークラブ会員から「1962年に当クラブが寄贈した彫刻の劣化が激しいので修復できないか」とのメールが友の会のHPに舞い込んだこと。

所有権や著作権の問題があることから友の会が昨年、現地を訪れて点検したところ、<愛の母子像>のそばにある<牧歌>(坂垣道)も劣化が激しく、市の担当課に2体の修復を要望した。あわせて市民の彫刻愛好

家が清掃、点検を行い、不都合があれば市が修復を進めるシステムの設置を提案した。現在、こうした制度は友の会がある札幌以外にはなく、友の会の高橋大作会長は「野外彫刻を長く愛するため道内の他の自治体にもこうしたシステムの導入を勧めたい」と話している。



イタドリと軟石が素材

渡辺行夫さんが札幌で個展



小樽の彫刻家、渡辺行夫さんが個展「資源カメラ」の第2弾を、2月4～9日、札幌市中央区のさいうギャラリーで開いた。

地下鉄大通駅コンコース内の500m美術館で昨年開いた個展の続編。石の大規模なモニュメント彫刻で知られる渡辺さんは近年、道端に自生するオオイタドリを用いている。

軽いことに加え、ほぼ無尽蔵に入手できるのが利点。原発を皮肉った「毛髪力 明るい未来を作るカモ」の連作や、自然が人間を監視しているという警告の意味を込めた「森の目」などのほか、札幌軟石によるフロウの小品なども出品された。

6～9月、山内壮夫展

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌出身の彫刻家、山内壮夫の、没後50年を記念した展覧会が、6月14日から9月28日まで、

本郷新記念札幌彫刻美術館で開かれる予定だ。

山内は、札幌市中央区大通西1の「希望」をはじめ、中島公園や真駒内、旭川市内などに多くの野外彫刻がある。本郷新らとともに旧制札幌二中(現札幌西高)出身の彫刻家として紹介した展覧会は過去にあるが、山内個人の回顧展は初めて。会期中にはシンポジウムも計画されている。

本郷新の「入門」展

札幌芸術の森美術館で



「生誕120年 入門・本郷新—彫刻家が遺した愛—展」が1月18日～3月9日、札幌芸術の森美術館B展示室で開かれた。

本郷新記念札幌彫刻美術館が所蔵する作品のうち、「無事の民」シリーズや、「泉の像」など野外彫刻のエスキス、最晩年に病床で描いていた「十字架のキリスト」など、彫刻や絵画計33点を展示。彫刻家の歩みがコンパクトにつかめる構成になっていた。

札幌彫刻美術館友の会

2025 年度総会

日時:5月18日(日)13:30～

場所:北大学術交流会館 第4会議室 (札幌市北区北8西5)

▽議題 2024 年度活動報告、同決算監査報告、2025 年度活動計画案、同予算案ほか

▽特別講演会 講師:古家昌伸氏
(北海道芸術文化アーカイヴセンター代表)

事務局日誌▼2024年11月29日
 =彫刻家・伊藤隆弘さんがブロンズ像修復のため、長万部町平和祈念館を下見▼12月9日=新年会オークションのため、釧路市の荒磯さんや、道内の木彫作家からフクロウ像の提供▼12日=定例役員会（エルプラザ）会報90号編集報告、新年会打ち合わせ、本年度の活動全般について協議など▼18日=彫刻美術館運営協議会に高橋会長出席▼26日=会報90号発行、「ぶらり札幌」追加発送▼2025年1月16日=定例役員会（エルプラザ）新年会準備、会報91号編集企画▼2月13日=定例役員会（エルプラザ）新年会打ち合わせほか▼15日=2025年新年会（ネストホテル札幌駅前）
編集後記▼編集を引き継ぐことになりました。何事にも不慣れで、皆さまにご迷惑をおかけしますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします▼編集作業の最終盤、顧問の國松明日香さんの訃報が飛び込んできました。題字の揮毫をはじめ当会もお世話になりました。ご冥福をお祈りいたします。（梁井）

札幌彫刻美術館友の会
 会報「いずみ」 No.91
 2025年4月1日発行
 発行人 高橋 大作
 編集者 梁井 朗
 札幌市豊平区西岡2の13の10の3
 h-art_2005@mail.goo.ne.jp
 印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」91号 目次

自作自選61	《ハルノウタ》	櫻井 純 . . .	表紙
宮の森の四季61	「冬も賑やか」	吉崎 元章 . .	2
風見鶏「ワインの釉薬〜イタリアでの成果について」	松本 隆	3	
リポート「抜海への旅」	梁井 朗 . . .	4-5	
友の会ニュース		6-7	
新年会／岩見沢の野外彫刻を調査へ／総会日程／渡辺行夫さん個展／			
6月から彫刻美術館で山内壮夫展／本郷新「入門」展			
事務局日誌／編集後記／目次／美術館行事予定 8			

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■コレクション展

本郷新 彫刻の設計図リターンズ

開催中～5月25日

本郷新の野外彫刻は、北海道内のみならず全国各地におよそ100点が設置されています。彫刻の社会性、公共性を重視した本郷は、戦後、モニュメンタルな野外彫刻の制作にとりわけ熱意を傾けました。本展では、それらの像が完成に至るまでに模索された貴重な設計図面やラフスケッチなどを紹介します。公的空間ならではの制約があるなか、野外彫刻が生まれた足跡、あるいは完成や設置にまで至らなかった経緯をたどり、野外彫刻に対する本郷の思いを読みとります。なお、本展は2021年に開催し、コロナ禍で中断された展覧会をアップグレードし再現するものです。

記念館

■コレクション展 2024—2025

開催中～5月25日

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目

☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>